知識探訪　多民族社会の横顔を読む
協力：日本マレーシア学会（JAMS）

クアラルンプール・チャイナタウンの黄金時代を想起させるクワイ・チャイ・ホン

周蔚延（愛知淑徳大学外国語教育部門講師）

クワイ・チャイ・ホンで最も目を引く2.5階の高さの壁画（筆者提供、2022年8月撮影）

マレーシアの首都クアラルンプールのチャイナタウンのプタリン通りから西に１つ筋違いのパングン小路（Lorong Panggung、マレー語で「舞台小路」）は、地元の人たちにクワイ・チャイ・ホンと呼ばれてきた。再開発を経て、クアラルンプールで最新の観光名所の１つとして、また最もインスタ映えするスポットの１つとして、2019年以降注目を集めている。

クワイ・チャイ・ホンは「鬼仔巷」の広東語読みで、「おばけ小路」を意味する。名前の由来には３つ説がある。

１つ目は、この小路で遊ぶわんぱくな子どもたちを「クワイチャイ」（鬼仔）と呼んだという説である。２つ目は、この小路には暴力団や泥酔者、麻薬中毒者、犯罪従事者など「クワイチャイ」と呼ばれる人たちがたむろしていたという説である。３つ目は、この小路が龍虎会という犯罪組織の隠れ家で、その団員が「クワイチャイ」と呼ばれていたという説である。

クワイ・チャイ・ホンには100年余りの歴史を持つ古い建物が並び、その壁はチャイナタウンの黄金時代とされる1960年代をテーマにしたウォールアートに彩られている。中国の伝統楽器である二胡を演奏する老人や、対聯（ついれん＝赤い紙に縁起の良い対句を書いて門やドアの両側に貼る装飾）を書く書家、娼家の窓から客引きする娼婦などが描かれている。

とりわけ目を引くのが、2.5階分の高さを誇る巨大壁画である。ゴム飛びをする子どもたちや、洗濯物を干す女性、床屋など、1960年代の生活をイメージさせる絵が描かれている。壁画の前に置かれた椅子に座ると、壁画の中の床屋に髪を切ってもらっているかのような写真を撮ることができる。

この巨大壁画では、カーラーを髪に巻き、たばこを口にくわえた女性が存在感を放っている。華人の文化や社会に詳しくないと、この女性が何者か分からないかもしれない。マレーシアの華人はこの女性を見ると、ほぼ間違いなく大家だと認識するだろう。マレーシアや香港の華人社会には、１つの部屋を小さな部屋に分割して貸し出し、家賃収入を得る大家が存在した。

クワイ・チャイ・ホンにもその歴史があった。壁画の女性の風貌は、マレーシアでも人気の香港の映画監督チャウ・シンチー（周星馳）が監督・出演した『カンフーハッスル』（2004年）に出てきた大家と酷似している。そのためマレーシアの華人は壁画のこの女性を大家であると認識する。

クワイ・チャイ・ホンは食でも1960年代を演出する。古い建物が改修され、本格的な地元料理を提供するレストランやカフェ、バーに生まれ変わった。一番の人気店は、何九海南咖啡店（Ho Kow Hainam Kopitiam）である。

同店は、中国海南省出身の何家信が56年に設立し、お茶や半熟卵、トーストなどを提供してきた。当初の店名は「信記」で、何家信の息子で現在の店主である何九が事業を継承した時に現在の店名に改称した。何九海南咖啡店が提供する代表的な料理には、バターとカヤジャム（ココナツミルク、卵、砂糖をベースにした甘いスプレッド）をサンドしたトースト、カレーチキン、海南茶とその他多様な飲み物などがある。

これらの料理は海南省にルーツをたどり得るが、マレーシアで独自の発展を遂げたマレーシア料理である。

他方でクワイ・チャイ・ホンの再開発は、歴史的・文化的な正統性に欠けているとの批判もある。例えば、クワイ・チャイ・ホンの建築物には広東省西関の建築様式が見られるが元来の様式や色が損なわれたとの批判がある。

これに対して、再開発を担ったプロジェクトマネージャーのジーン・チャンは、若者にも年配者にも足を運んでもらうことで歴史が記憶され継承されることを願い、歴史の断片の修復に最善を尽くしたと語る。

クワイ・チャイ・ホンは、華人の文化と芸術を体現している。他方で、華人以外の民族も数多くここを訪れており、多民族・多文化のマレーシアの縮図となっている。間もなく世界からも多くの観光客がここを訪れるであろう。

＜筆者紹介＞
マラッカ州出身。名古屋大学大学院人文学研究科修了。学術博士。マレーシア『星洲日報』国際新聞部翻訳者、マレーシア新紀元大学学院メディア学部講師などを経て現職。専門はマレーシアの華語映画研究。主要論文に“Debating ‘Chineseness’ and ‘national identity’ in the Sinophone Malaysian films The Journey (2014) and Ola Bola (2016)”, East Asian Journal of Popular Culture, 8(1), 2022がある。

Copyright(C) NNA All rights reserved. 記事の無断転載・複製・転送を禁じます